

説教題：不信仰な私を助けてください

日 時：2024年3月10日（朝拝）

ジェフ サンダース

### マルコの福音書 9:14-29

大学生の時、友達と春休みに車で旅行をしたことがあります。最後の夜、ホテルに泊まって翌朝に帰るか、泊まらないで夜通し運転して帰るか迷っていました。私が「夜通し運転しよう！そうすれば明日の朝には家に戻れるよ。そして俺の家に寄ってくれよ。母さんがパンケーキを作ってくれるんだ。超うまいよ！」と言うと、みんなが「本当？よし、オーケー、皆車に乗ろう！」と答えました。マットという友達が、来るときにも運転してくれたので、帰りも運転してくれることになりました。でも出発して数時間後、マットが「疲れてきたな」と言い出しました。私たちは皆、「そりゃあそうだろう。誰かが代わりに運転しようか？」と応えました。するとマットは「いやいや、大丈夫だよ。ちょっとガソリンスタンドに寄ってエナジードリンクでも買ってきて。元気になるから。運転するから奢ってくれよ」と答えました。そこで私たちはマットにレッドブルを5本買ってきました。彼は一気に全て飲み干しました。私は今までにマットがこんなに元気そうな姿を見たことがありませんでした。笑。私は助手席に座っていて、他の4人は後部座席で早くも眠りに落ちてしまっていました。私とマットだけが起きていました。その時は早朝3時くらいでした。私は5本のレッドブルは飲んでいなかったもので、やはりだんだんと眠くなってきました。私はマットに「あー、ちょっと眠くなってきた。30分ぐらい寝てもいい？」と言いました。マットは「いいよ。俺は全然疲れてないから。こんなに元気なの、人生初めてだよ。」と答えました。「あそう？ いいね。じゃあちょっと寝るわ。運転してくれてありがとう。」私が安心して眠っていると、突然車が激しく左右に揺れて私は驚いて目を覚ましました。でも後部座席のみんなはまだぐっすり寝ていました。「どうしたの？ どうしたの？」とパニックになってマットに聞くと、「あー大丈夫大丈夫、一瞬寝ちゃっただけ。心配すんなよ。」と答えました。「いやいや大丈夫じゃないだろう」と思い、次のガソリンスタンドでマットに停車させ、私もレッドブルを数本飲んで、家に着くまで頑張っ

て起きていました。

みなさん、今まで誰かのことや、状況や、自分自身などを本当に強く信じていたのに何かが起きて全てが失われたような気持ちになったことはありますか？私の場合、友達のマットに対して強い信頼を抱いていました。彼は優れた運転手だし、事故を一度も起こしていないし、責任感がありました。今振り返ると、おそらく私の信頼はマットじゃなくてレッドブルに対してだったかもしれないけど、それでもなんだかんだで、安全に帰れると確信していま

した。でも、もはやマットに対する信頼を完全に失っていました。不安で怖くなり、私は家に帰るまで必死で目を覚ましていました。でも、私ができるのはただ寝ないで座っていることだけで、私の力ではなにもできませんでした。

こんな時は、私たちの弱さや無力さやがよくわかるのではないのでしょうか。自分たちがどれだけ助けを必要としているかがわかります。今日の話では、実際に信仰を持たなかった人々の二つの例が明らかになり、彼らの頼りなさが表れました。今日の話では、信じることができなかつた人の例から、彼らに足りないもの大きさがわかります。不安、恐れ、信仰がかろうじて保たれている状態での生活の不安定さも見られます。今日はこの話を見ていきますが、その中でこの箇所が私たちに神様と繋がる方法を教えてくれると思います。そして、こんなときにどのようにその方法を実践するかも考えていきます。

それでは、最初のポイントを見てみましょう。

## 1. 弱さを認める

今日の話の前の箇所では、イエスは山の上にいました。彼は山の上で、聖書で最も有名な聖人のふたり、エリヤとモーセと共に、栄光に包まれていました。そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人の弟子がすべてを見守っていました。それはまさに素晴らしい光景です。しかし、その後、イエスは山を下りて、下での現実が全く栄光ではないことを見つけます。不協和音があり、弟子たちは宗教指導者と議論し、不信仰が広がっています。この箇所ですべてでてくる信仰不足の人物は、ひとりの父親です。この箇所によると、イエスと三人の弟子が山を下りる時に議論が起きていたとのことで、議論の内容については語られていませんが、弟子たちが悪霊を追い出せなかつたことが原因である可能性が高いです。なぜなら、論争の最中にこの男性が自分の問題を抱えてイエスに近づいてきたからです。その問題は彼の息子に関するものでした。息子は痙攣し、口から泡を吹き、歯を食いしばっているとのことです。こんな箇所を読むと、同情せずにはいられません。この少年が毎日どんな思いでいたのか、想像できますか皆さん。苦しみ、苦痛。何かが自分を操っているからいつ痙攣が起こるか分からない恐怖。学校ではどうだったのでしょうか？他の人たちはどう思ったのでしょうか？他の子供たちや町の人々は、いつ発作が起きるか分からないから彼を恐れていたのではないのでしょうか。彼はいじめを受けていたかもしれません。今日の箇所の後半にあるように、この悪霊が水や火に彼を投げ込み、彼を傷つけようとすることもありました。この男の子は、もしも悪霊に取り憑かれていなければ、どんな

人生だったのかなと想像していたのではないのでしょうか。おそらく、地獄のような生活だっただろうと思います。

父親の気持ちも想像できますか。幼少期からこれを経験している息子の世話をすること。苦しめられている息子の世話をすること。何度も何度も何度も、何もできないでただ見守ること。何回もこの全てが自分のせいだと考えたことでしょうか。「息子にこれを引き起こさせたのは、私が何か悪いことをしたからかもしれない。」息子の生活を良くするために、父親が何度も試みたさまざまな方法があったでしょう。そして、父親はここでまた別の方法を試みます。彼の息子、ルカの福音書によると唯一の息子をイエスのもとに連れて行きました。なぜなら、イエスが少しでも助けてくれるかもしれないと聞いたからです。しかし、そこに着いたとき、イエスは山にいたため直接会うことはできませんでした。代わりに彼は弟子たちに出会って彼らは自分に対してこの悪霊を追い払うことができると言いました。そこで彼は息子を彼らに託しますが、彼らは悪霊を追い払うことができませんでした。もうほとんど希望を失っていたでしょう。イエスに対してもそれほど期待していなかったのではないのでしょうか。

弟子たちはどうだったのでしょうか。イエスは彼らに力と権威を授け、それを果たすようにと命じました。弟子たちにとって、悪霊を追い出すという仕事はどれほど大変なものだったでしょう。私はむかし洋服屋で働いていたことがあるのですが、最初の大きな責任は店の前のテーブルにあるすべてのシャツがきちんと並んでいるか確認することでした。すごい緊張しました。その程度でも緊張するのですから、悪霊を追い出す任務を果たすなんて考えられません。彼らはその責任を果たせましたか。彼らはそれができなかったです。彼らはそれを追い出す能力が自分たちにはないことに気づきます。彼らはこれまでそうしたことにそんなに問題はなかったようですので、なぜ今はそれができないのでしょうか？まるで彼らにはゲームの最後の数秒でボールが渡されましたが、得点できなかったサッカー選手のようなのです。失敗しました。彼らはおそらくかなり混乱していたでしょう。おそらく彼らはお互いに話し合っていたでしょう。「わからない。イエスはこれをやらせてくれたし、力もくれたのになぜできないんだろう。」彼らが感じた恥ずかしさを考えると、かなりつらかったでしょう。何かをできるようになり、そして一瞬で大失敗を数十人の前で犯すことはどれほど恥ずかしいことか。箇所によるとそこには宗教指導者である律法学者がいたと書かれています。そして、彼らはおそらくこれらのプロではない、宗教に訓練されていない人々がパフォーマンスを試み、完全に失敗するのを見て、よろこんでいたのではないのでしょうか。そして、まさに痛い目にあったところにさらなる屈辱を加えるように、イエスがついに山から降りてきたとき、父親は弟子たちが失敗したことをイエスに話しました。

この箇所では皆の無力さがわかるのではないのでしょうか。父親と弟子たちの描かれた弱さに気付きます。彼らは両方とも弱く、自分自身や他者への信仰が欠けており、自分たちの頼りなさが深くわかりました。

はじめにお話ししたように、この箇所は神様とどのように繋がるかに焦点を当てています。最初のステップは、自分たちの頼りなさや弱さを認めることです。何も必要ないと思う人は決して神様を求めません。自分の弱さを隠そうとする人は、神様との繋がりに苦労します。なぜなら、神様に繋がるために、自分のニーズを満たす力がないことに気づかないといけませんから。無力な人、弱い人こそ、神さまと繋がることができます。クリスチャンであることは、自分の弱さを認め、自分の力で自分を救われないことを認識する人であることを意味します。神様と繋がりたいなら、この認識が不可欠です。時間があればマルコの福音書を読む時間を取ることをお勧めします。マルコの福音書では神様と繋がる人が誰かを観察してください。力のない人、弱い人です。マルコ1章のひどい病人、マルコ2章のまひした人、片手の萎えた人、嵐の中の弟子たち、別の悪霊に取り憑かれた人、12年間出血していた女の人、娘が亡くなったヤイロ。これらの福音書の中の話は、弱い人たちこそが、イエスに繋がってその結果、神様自体と繋がったことを強調します。

これは世界が教えることとは逆ではないのでしょうか。「私たちは弱さを隠し、強さを見せるべきだ！それがこの世で成功する方法だ！」しかし、見てください、神様はこの世界とは違います。そして、ご自分と繋がるためには、社会や周りの人が期待していることとは違うことをしなければなりません。弱さを見せること、失敗を認めること、自分の無力を認めること。これが神様との繋がり方なのです。

## 2。信仰を持って対応する

前にも言ったように、神とのつながり方にはもう一つ大事な部分があります。それが今日の二つ目のポイントです。信仰を持って対応することです。まず、自分たちが助けが頼りなさだと認識して、それに応じて信仰で対応します。でも、信仰で対応するとは、具体的にはどういうことでしょうか。よく考えると、私たちは信仰で対応するとき、強く確信に満ちた気持ちが必要だと思ふことがあります。神様に近づくとき、まず全てを理解している必要があると思ふことがあります。正しい選択だと**100%確信**して、神様と繋がることについて絶対に疑いを持ってはいけない、と思ふことがあります。

でも、そうではない。そうではないとマルコが教えてくれています。それだと信仰が自分のがんばりによることになって、神様のことじゃなくなっちゃ

うんですよね。では、もう一度この父親を見てみましょう。22節では、彼が自分の息子がどれだけ悪霊に憑かれたかをイエスに説明した後、「でも、何かできるなら、どうかあわれんで、お助けください」と叫びます。これって強さの表れでしょうか？イエスが癒してくれると完全に確信している人の様子でしょうか？いいえ、これは弱さと信仰の不足の表れなんです。イエスは「できるなら、というのですか」と言います。まるで「話している相手が誰だか分かっていないのか？」と言っているようですね！実際のところ、その父親はイエスが誰かを完全に理解していませんでした。彼はイエスについて素晴らしいことを聞いていましたが、本当に癒しをもたらす存在だと完全に信じていませんでした。父親は何度もがっかりさせられてきたので、信じることを躊躇していることが分かります。彼はもうこれ以上がっかりしたくないのです。その後、イエスは「信じる者には、どんなことでもできるのです」と言います。そして、父親はおそらく新約聖書全体でもっとも有名なセリフのひとつを口にします。「信じます、不信仰な私をお助けください。」これは強い信仰の表れではなく、弱くてもろい不足の表れなんです。疑いと混ざった信仰。かろうじてつかまえている信仰。完璧ではない信仰。この人は強さの象徴ではなく、むしろ弱さの象徴です。彼は大きな頼りなさだけでなく、信仰の不足も抱えています。彼の信仰の応答は、私たちが神にどのように応答すべきだと思っている方法とは非常に違います。それは私たちが持っているべき信仰とも非常に違います。

信仰の強さより、信仰の対象がずっと重要なのです。大切なのは信仰の素晴らしさじゃなくて、信じている対象の素晴らしさです。

これはある神学者がある会議で使った例えなんですけど、このことをもっと理解できるように紹介したいと思います。想像してください。二人のユダヤ人、名前はスズキとワタナベ。（ちょっとユダヤ人っぽくないけど。）最初の過越祭の前日、ふたりは少し話していました。知らない人のために言うと、過越祭は旧約聖書と呼ばれる聖書の前半で重要な出来事で、古代エジプトの十の災いの最後の夜に起こったものです。災いはファラオの心がかたくなり、奴隷として苦しむイスラエル人を解放しないことへの結果でした。神の選ばれた民として、奴隷となったイスラエル人の長男たちは、最後の災いで死から救われるために、子羊の血で戸口に印をつけました。会話の中で、スズキがワタナベに言ったことは、次のような感じでした。「今夜何が起こるか、ちょっと心配じゃない？」ワタナベは「神様はしもべモーセを通して何をすればいいか教えてくれたよ。心配しなくてもいい。子羊を殺して、戸口に血を塗ったんでしょ？それをやってないの？」

「もちろんやったよ。馬鹿じゃないから。でも、ここ最近の出来事を考えると、それでも結構怖いんだ。分かる？この災いの中で、カエルや川が血に変

わるんだもん。ほんとにひどいことだよ。そして今、長男が殺されるかもしれない。わたなべは大丈夫だよ。お前は三人の息子がいるけど、俺は一人だけなんだ。息子を愛してるし、もし今夜通り過ぎる死の天使が彼を連れて行くなら、俺どうしたらいいか分からないよ。神が言ってることは分かってる。血を塗ったんだ。でも、それでも怖いんだ。はやくこの夜が終わるといいな」

そしてワタナベは答える。「全然怖くない。神の約束を信じてるから。絶対に信頼できる方。」その夜、死の天使がやってきました。どちらの息子が亡くなったのでしょうか？もちろんの答えは: どちらも亡くなっていません。

死は信仰の強さに純粹さによって通り過ぎるのではなく、子羊の血に基づいて通り過ぎるのです。

弱い信仰でも強い救い主に対する信仰は、救いの信仰なのです。実際、強い救い主への弱い信仰も、強い信仰と同じくらい「救いの信仰」です。なぜなら、信じる能力ではなく、救い主が救う能力にかかっているからです。強い救い主への弱い信仰も、強い救い主への強い信仰と同じくらい「救いの信仰」なのです。最終的にあなたを救うのはあなたの信仰ではなく、信仰を寄せる救い主なのです。

もう一度今日の箇所をご覧ください。イエスは弱い信仰の応答にどう反応したのでしょうか？ 疑念と混ざった信仰はどうだったのでしょうか？ イエス様が **19** 節で言ったことの後、イエスは行ってしまいましたか？ 絶対に違います。 **25** 節を見てください。イエスは、群衆が駆け寄って来るのを見ると、汚れた霊を叱って言われた。「口をきけなくし、耳を聞こえなくする霊。わたしはおまえに命じる。この子から出て行け。二度とこの子に入るな。」そして、彼はその子供の手を取り上げ、彼は起き上がりました。イエスは、折れかかったような信仰を見ても、それに対応しました。

私たちの信仰は、私たちを救うには十分に強力ではありません。キリスト教の信仰はあなたの信仰についてではなく、キリストと、キリストの救いの力についてです。

最も小さな弱い信仰でも、完全に神に結びつきます。ほんの少しの信仰でも、疑念の混ざった信仰でも、私たちを神の救いの力に結びつけます。

今週この箇所を考えていたとき、私はいつも **19** 節に引き戻されました。これはまさに神が私たちのためにしたことです。神様は、単なる不信仰だけでなく反抗に満ちた世界から目を背けるのではなく、愛から行動して状況を修復しようとしていました。神様はその唯一の子を世に送り、私たちが信仰を見いだせるようにしました。イエスは弱く無力になることで、私たちに救いを提

供しました。驚くべきことに、これは神様の最初からの計画でした。多くの苦しみに耐え、最終的に死に直面することでした。

考えてみてください。イエスが経験した信じられないほどの苦痛、容赦ないむち打ちによって背中の肌が裂け、そして手と足に釘で十字架に打たれる様子を。それは想像できますか？神様の苦悩も考えてみてください。神様が自分の唯一の子にこれらすべてを耐えさせ、最終的に恐ろしい死に直面させる様子を。今日の話の父と違って、神様は実際には自分の子イエスを助ける力を持っていました。神は無力ではありませんでした。ではなぜ助けなかったのでしょうか？自分の子にもっと良い人生を望んでいたのではないのでしょうか？いいえ、それは私たちのためでした。神は自分の子を助けないことを選び、私たちを助けてくれました。弱さと無力さを受け入れたイエスは、私たちが彼と深く結びつくことができるようになりました。ただ今だけでなく、永遠にわたってです。

では、私たちはどのように反応すればよいのでしょうか？まず、自分の弱さ、罪、そして自分自身を救う能力のなさを認めること。次に、信仰を持ち、すべての疑念と混乱を抱えながらも、神に対して。もしあなたが今日ここにいて、神とつながりたいと思っても、疑念と混乱があるから心配だとしたら、この話の父親のように祈ってみてください。今、祈りの中で彼の言葉を反復してみることをお勧めします。「信じます。不信仰な私をお助けください」と。それでは祈りましょう。